

後方師匠面の転生者に
『功夫が足りん!!』と言
われ続けた噛ませ犬が
バグった話

後方師匠ズラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生者「後方師匠面してえなあ……そーいやこの世界、原作の時系列に嘸ませ犬いわわ。アイツ鍛えよ」

そんなノリでゲームの世界に転生してきた男に鍛えられた嘸ませ犬が八極拳と六合大槍でファンタジー世界で殴り合いするだけの話。

下手に実力付いた所為で踏み台ムーブが踏み台ムーブにならなかつたり、卑屈な癖に誇れる功夫がある所為で『勘違いするなよ？ 僕はお前を助けに来たんじや無い。アイツを倒しに来たんだ』的なツンデレ発言を行う様になつたり、まあそんな感じですよ。

目次

功夫之壹	1
功夫之貳	8
功夫之參	15
功夫之肆	21
功夫之伍	29
功夫之陸	38
功夫之柒	48
功夫之捌	63
功夫之玖	70

功夫之志

功夫。それはカンフー、或いはクンフー、コン・フーとも呼ばれ、中国武術で重要視される『練習・鍛錬・訓練の蓄積』、それに掛けた『時間や労力』と言う意味を持つている。

——そして、此処にそれを弟子に言いたいだけの転生者が居た。

とあるゲームの世界に転生した彼は、自分が主人公達の世代よりも前の世代に生まれていた事に気が付き、原作介入をしようと考えた結果生まれたアンサーが『後方師匠面』であり、その矛先が向けられたのが原作では囃ませ犬役だった少年である。

『ファイル・ラント』

騎士家系の三男坊であり、父や兄、果ては母親までもが高名な騎士であり、才能に溢れて居た。

若くしてファイル以外が龍殺しを経験しているドラゴンスレイヤーの異名を持つ名門中の名門、しかし原作におけるファイルは不遇の一言に尽きた。

才能が無い訳ではない。しかし天才には一步及ばない秀才であり、感覚や感性を中心に強さを構築した家族^{天才}達とは違い、彼が成長する為にはどうしても努力や基礎的な積み重ねを必要としており——それが家族との確執を生む。

父親^{天才}の視点からの父親^{天才}の肌感覚による指導。長兄次兄共にそれで実力を発揮し、活躍をしているからこそ自分の血筋の力を疑わない。それ故に下されたフィルへの烙印は凡才^{落ちこぼれ}。

重ねて言うがフィルと言う少年は才能が無い訳では無い。天才には及ばないまでも並の人間よりも数歩先を行くだけの才能は持つてはいる。いるのだが、天才の家系だからこそ判断基準は同じ天才達の能力を基本水準としており——故にフィルは家族の事を疎ましく感じていた。

その絶対的才能差に打ちのめされた彼は本来の歴史ならば人生を楽な方へと逃げる様になり、最終的に主人公の踏み台として落ちる所まで墮ちて行く筈だった。

だが、その運命に『弱キャラを強化して師匠面してえなあ』と考えていた転生者が関わる事で変化が生じる。これはそんな話。

——その男との出会いは父親からの失望の目に耐えられなくなったフィルが

実家から逃げ出した時、街角でぶつかった事がきつかけだった。

全身を黒いローブで包み槍を背負った男はどうやら冒険者らしく、勢い余って尻餅を
ついてしまったファイルを見て驚いた顔をしていたのを彼は覚えてる。

「このつどこ見て歩いてるんだよ!! 冒険者風情がこの僕にぶつかるなんて、良い度
胸してるな!!」

ファイルは口が悪い。これは単純に家族間の壁と劣等感、家名を背負っているが故のプレッシャーと名門の生まれであると言うプライドが負の方面へとブレンドされた事に起因する。

家族間の歩み寄りの無さが秀才の原石を腐らせ、本当の無能へと貶められたとも言えるそれは、ある種の強がりとそれによる精神補強にも近い。

だが、だからこそ彼は他人とのコミュニケーションが苦手であり、原作ではそんな彼の高圧的な態度や非を頑なに認めない言動が災いし、理解者に恵まれる事は人生の最期まで無かった。

しかし、このぶつかった男こそが転生者であり、『うつひよ。初手かませ^{ファイナル}じゃん!!
よつしや適当に騙くらかして後方師匠面したろ!!』などと考えていた為か、その言い方

に眉を顰める事なくこう口にする。

「小僧。強くなりたいか?」

相手を見下しながら初手でこんな事を口にする転生者。彼も中々のコミュ障であり、怪しさ満点の誘い文句にしか聞こえない。実際肝心のファイルもその言葉に思いつきり警戒してしまい、後方師匠面どころの話じゃないのだが、謎の強キャラ感を出したいのか、背を向けたまま絶句するファイルへ『強くなりたいたなら付けてこい。俺がお前を強くしてやろう』と言つて歩いて行く。

普通なら絶対に付いてこない。少なくとも怪しさしか感じない以上師弟関係云々どころの話では無いのだが、この時期からファイルは楽な方へと逃げる癖が付き始めており……それ故に深く考えること無くその後をふらふらと付いて行ってしまった。

……そして此処から、ファイルの10年以上続く功夫の積み重ねが始まる。

▽

「クツソツ!! ああの野郎何が『強くなりたいたなら付けてこい』だ!! 何回も何回もおん

なじ事させやがって!!」

そうぼやくフィル。彼があの不審者について行つて早数ヶ月が経過したが、行なつて
いる事は足腰を鍛える為の『站^{たんど}?』と呼ばれる鍛錬法であり、馬に乗っている時のよう
な姿勢を維持し続ける事で、拳法の打撃力を強化する瞬発力を鍛える物だ。

転生者の男が教える事にしたのは所謂中国拳法。その中でも有名かつ一撃に重点を
置いた『八極拳』、しかもより実戦向きである『李氏八極拳』である。

ただし、これらは転生者が持っている知識を並べただけの物であり、彼自身が習得し
ていない物なのだが、師匠面してにやにやしたいだけの男である為、『一撃必殺はロマ
ン』と言う考えの下で教えられており、フィルの身に付かなかつたとしても、そもそも
からフィルの立ち位置が噛ませ犬である事からそれでも問題無いと考えられていた。

「ほれ、足が震えているぞ。功夫が足りん功夫が!!」

「馬鹿の一つ覚えみたいと同じ事を……ッ!!」

念願の言葉を言えてウツキウキの転生者とは対照的に歯を食いしばつて姿勢を維持
するフィル。既に数時間空気椅子状態であり、普通なら膝を突いてもおかしくない
のだが、腐つても秀才。意地でも姿勢を維持し続けていた。

その光景は最早習慣と呼べる物になっていたのだが、彼の家族が見れば目を丸くしていただろう。

堪え性の無いファイルが数ヶ月。しかも目に見える成果の無い鍛錬だけをただ重ねている事に。

これには理由が幾つかある。別に師弟関係に信頼が出来ているとかそんな話では無く、単純にファイルと功夫と言う考え方の相性が良かったのだ。

功夫とは即ち努力とそれに掛けた時間の積み重ね。才能云々に左右されない確かな力、応用や天才の肌感覚的な抽象的な物では無く、れっきとした肉体改造。だからファイルは続けられた。

確かに辛く、苦しい鍛錬であり、何度も何度も同じ事の繰り返しを愚直に行うバカの一つ覚え、気性の荒いファイルには苦痛に近かったが、それでも家族との鍛錬と比較すれば性に合っている。

それ以上に、人が力尽きるまでにやにやと笑いながら『功夫が足りん』を連呼する馬鹿を殴り倒したい。そんな反骨精神が先ず一つ。

そして、数ヶ月この姿勢を維持し続けている事で慣れが生じて膝から崩れる事も少なくなり、確実に前へ進む事を実感しているからこそ生まれる認められたいと言う承認欲求。それが今のファイルを支えていた。

こうして彼は異界の拳法とそれに付随する『六合大槍』を習得して行く、囃ませ犬だった少年は十年の歳月を此処から重ねて行くのだった……。

功夫之式

ファイルが八極拳の功夫を積み重ね始めてはや数年。彼の實力はそれまでの停滞が嘘の様に伸びており、並の人間ならば太刀打ち出来ないほどの力を付けていた。

「——破ッ!!」

そんな掛け声と共に背中全面を使用した体当たり、『鉄山靠』てつざんこうが秘密の鍛錬場に生えている巨木へ放たれ、ドンッ!!と言う酷く重い衝撃音と共に根本から巨木が引っこ抜かれる。

メキメキと音を立てながら倒れて行く巨木を見ながらファイルは深く息を吐いて気を落ち着けつつ、針金細工の様に鍛えられ始めた身体の汗を拭き、彼は鷹の様な鋭い目を自分の師へと向ける。

「魔力も使わずにやってやったぞ? これで俺も一流で良いだろ?」

「いいや、まだ功夫が足りん!!」

「……何が足りないって言うんだよ」

数年間の功夫。フィルの人生の中で他に打ち込む事は何も無いと言わんばかりに八極拳に没頭し、周りとの確執も一切気にならなくなっていたが、この腹が立つ師匠は一向に実力を認めず『功夫が足りん』の一言。

自分が薙ぎ倒した巨木に腰を下ろしつつ、そろそろ基礎訓練から脱却したいと考えるフィルは責める様な視線を彼に向ける。

年々積み重なって行く自身の功夫、それが彼のラント家内での劣等感を払拭しつつ、自信を付けさせる事になったのだが、性格の矯正が上手くいかなかったらしく、未だに家族間との溝は埋まっていない。

その苛立ちを発散する為にまた功夫へと打ち込み……それを繰り返していた為、基礎以外の秘伝を教えて貰いたいと言う思いがフィルの中で燻っていた。

が、そんな思いなぞつゆ知らず。後方師匠面の転生者は『強くなっても所詮囃ませ』と言う先入観が入っている為か、まともに取り合う事は無い。あくまで彼は『後方師匠面がしたいだけ』なので、それも当然なのだが……問題は此処から。

——此処で彼がフィルにとって満足できる内容の言葉を吐いていなければ、フィルは強キャラ止まりだった。が、この余計な一言が強キャラをバグキャラへと変貌させてしまう。

「——『千招有るを怖れず、一招熟するを怖れよ』お前に教えている武術、その達人が口にした言葉だ」

「なにそれ？　どんな意味なんだよ」

「多くの技を身に付けるより、ひとつの優れた技を極めよと言う意味だ。秘伝なんてものはそもそも基礎の延長上、お前は天才じゃないんだ。基礎でも極めておけ」

この時彼は『それっぽい事言えたし、後方師匠面は楽しいなあ』などと考えていたが、その一言はファイルにとって考えても見なかった事だったらしく、それ以降彼が自分の口から秘伝を乞おうとはしなくなった。

……しなくなったが、代わりに狂った様に基礎訓練だけを行う様になって行く。

▽

——月明かりに照らされた秘密の鍛錬場。そこに一人の少年が立っていた。

若木の前へと立ち、手には六合大槍と言う長槍を持っており、瞳を閉じて気を落ち着かせている様子。

数分。或いは数十分後か、不意に彼が放った震脚によって地面が揺れる。その振動が

伝播して周囲の木々から木の葉が散る。その一つ一つを、ファイルは六合大槍を打ち放つ事の一つ残らず穿つ。

ヒラヒラと舞い落ちる木の葉が狙いをズラすので穿ちにくく、不意に風が吹いた所為で一枚だけ狙いから外れてしまった。

（槍の穂先に連なる二十の木の葉、その最後の一枚が不恰好じやまだまだ功夫が足りない……か）

（八極拳も六合大槍も手足の様に扱える。今日は巨木すら薙ぎ倒すことが出来た。自分は目に見えて強くなっていると……何処かで僕は満足していたらしい）

穂先に付いた穿ち損ねた木の葉の一枚を指先で弄りながらファイルはそう独白する。

家族への反発、名門のプレッシャー、自分のプライド。色んな物を原動力に今まで力を付けてきたが、八極拳を学ぶ中で次第にそんな縛りから自分が解放されて行っている事に彼は気が付いた。

—— ラント家は使用人を雇える程度には名門だ。屋敷を構え、武勇を飾り、強さを以って報償を稼ぐ。そんな家だからこそ強さは必要で、自分にはそれが無かった。

そうなるや兄弟からの失望だけじゃない。雇っている使用人達からも憐れみ

の目を向けられる。

屈辱。廊下を曲がった先で話されている自分への憐れみや、窓を開けているだけで不意に耳に入ってくる井戸端会議で出てくる嘲笑。

人間はそう言った他人の陰口で話が盛り上がる物なのは知っている、しかしそれ故に苛々してくるのだ。勝手に失望した様な目を向けてくる事や、父兄と比較して裏で笑う使用人も、そして……………弱い自分にも。

そう言った意味では、自分本位の適当な指導であつたとしてもフィルからすれば師匠面をする彼との鍛錬は惨めな思いを吹き飛ばす事が出来る物だつた。性格的に絶対に口にはしないが、その点に於いては感謝していると云つてもいい。

そして今日聞かされた言葉。異国の武術家が言つた『千招有るを怖れず、一招熟するを怖れよ』と言うその言葉は、フィルには天啓の様に感じる。

もとより天才では無いにしろ、フィルは秀才としての器を持っている。そしてその才覚を今まで八極拳と六合大槍と言う一点に集中させた結果が此処にある。数年前の彼には絶対に真似出来ない物が。

(僕は…………間違いなく強くなっている。父や母、兄さん達には敵わないかもしれない

けれど、それでも確実に強くなっている。——これが功夫か)

自覚すると同時に内側から今まで感じた事の無い熱が感情を支配する。グツグツと、まるで溶岩のように煮えたぎりながら、しかし粘性を持った重い感情。

それは押さえつけられていた承認欲求や反骨精神に加え、向上心が混ざり合った事で生まれた斑色の感情であり、彼はその感情に突き動かされるままに槍を動かして行く。

(欄^{ラン}……ナイ……チャイ……)

シュツシュツと言う風を斬る音が夜中の鍛錬場に木霊する。彼が行なっているのは槍術の基本の三法であり、槍を外側へと回す事で内側から外へ敵の武器を払う『欄』、同じく槍を内側へと回す事で外側から内へ敵の武器を抑える『拿』、最後に前の二つによって晒した敵の隙を穿つ『扎』。

この三法を彼は只管、闇雲と言っていていい程に行っていた。

(もつと僕は強くなってやる……誰にも負けないぐらいに強く……どんな奴だつて一撃で叩きのめせるぐらいに強くツ!!)

愚直に、それだけを、こうして彼はその基礎を徹底して自分に課す傍ら、師匠面の男から気まぐれに教えられる八極拳の技や思想を吸収し———物語が動き出す時期を迎えるのだった。

功夫之参

八極拳の武術家の語ったとされる言葉を胸に更に数年。ファイルは17才となっており、この国に於いて始まる騎士団への入団試験を受ける事になっていた。

ただ、だからと言って家族間で激励の言葉があった訳じやなく、一年前にファイルが父に騎士団へと入隊する事を告げた時も非常に淡白な反応であり、『そうか』の一言で憐れむ様な、不安そうな、そんな目を向けていた事を思い出す。

ファイルは記憶の中の父親の姿に苦笑いを一つ浮かべると、馬車に揺られながら誰一人見送りが無い屋敷を一瞥しつつ、一年前に不意に居なくなつた師匠面の男を思い出す。

(……突然現れたかと思えば、居なくなるのも突然だつたな)

思えば十年近く認められていなかったと言うのに、よくもまあ耐えた物だなと過去を振り返りながらそう自嘲するファイル。

居なくなる直前に『お前はもう一人前だ。教える事はもう無い』と言って颯爽と何処

かへと去って行ったあのよく分からない男。小馬鹿にはして来たが、一度も憐れまれたり比較された事は無かった。

無論そう捉えているだけかもしれないが……と、ファイルは懐かしさを感じさせるような表情を浮かべながら、一瞬だけ車窓から外に流れる風景の中に十年通った鍛錬場を見る。

(……ま、最後だし、礼ぐらいは言っておくよ。——ありがとうございます)

決して口には出さず。しかし心の内で素直じゃ無い礼を告げると、ファイルは車窓から視線を切ってこれから自分が受ける試験へと意識を移していった。

▽

——この世界について軽く説明するのならば、転生者視点で言うところのゲームを元にした世界であり、『エアロス・パラミシア』と言うSRPGに酷似した世界観を持つ。

単語そのものを日本語に直訳すれば英雄の御伽噺。そのような世界観である為、この世界には数々の魔獣や伝説上の生き物が存在し、その中で孤児院出身の主人公『ルークス』が仲間達と共に武勇を天下に轟かせる、そんな内容の世界観。

時には一般人では太刀打ち不可能な魔獣を退治し、時には未開拓の地を踏破しながら

開拓し、人類の繁栄の為にひたむきに努力する正統派なストーリーであり、それ故に人類同士の大規模な戦争やイザコザが起きていない時代。

——さしずめ、開拓期と言った所だろうか。

巨大な魔獣や伝説上の存在を下す事は誉れであり榮譽、亜人といった自分達とは違う存在達と人間が交流し始めたのもこの時代。

そしてもう一つ。この世界には魔法が存在し、それ故に人類の技術史が科学では無くオカルトの方面へと傾倒してしまっている事も特徴だろう。

魔法の才は様々あれどその開花には研鑽を必須とし、それを怠れば余程の規格^例外でもない限りは魔法を使う事が出来ない。

ただし、この世界の魔法とはファンタジックな代物では無く、現実の物理法則の延長線上に魔素と呼ばれる素粒子を介入させる事で発生する事象の総称であり、不可能を可能にする事も理論上はできるがその分野に対しての非常に深い知識が必要とされている。

天才と称される者達はこれらの事を肌感覚から掴んだ直感だけで行使する為、一流の騎士は一流の魔法使いでもあると言う。

向き不向きの傾向として生まれ持った属性という考え方もあるにはあるが、その辺りは鍛錬によって覆す事が可能である。

尤も、この時代ではまだまだ魔法に関する理論が感覺的な為、躍起になつてそれらの研究を行う学者達の努力も虚しく、生活基盤はそれに支えられていても便利な魔導具マジックアイテムによつて生活水準が上がっている、なんて事は無い。

討つた。討たれた。仇討ちをした。そんな人魔共に殺伐としながらもタフに生きる人々の世界。それがこの世界であり、同時に——主人公という約束された英雄が存在する世界でもある。

転生者がこの世界にその身を置く。その為に神の手によつて作り出されたゲームと酷似した世界。それは即ち主要人物の運命がある程度定められていると言えよう。

どう行動しても、運命がそう導く様に脱線した道筋を曲がりくねりながらも既定路線へと引き戻す。

中国武術を修め、十年の歳月を功夫の研鑽に費やしたフィルの内面が横暴な性格から変わらなかつた事も、彼の承認欲求の矛先が何故か家族に向かなかつた事も、家族との確執が残つたままな事も、全てを俯瞰する神の視点から言えば必定なのだ。

一種の強制力。しかし運命を強制されても矯正される事はない、何故なら運命とは覆し、乗り越える事が可能な代物。

フィルは既に『原作』と言う『強制力』へ抗う力を無意識のうちに有している。それは功夫と言う異界の概念と、それを実直に十年間積み重ねた事による自分の重ねた人生

を信じる精神力、その重みを一撃へと乗せる為の武術。

『原作』のファイルも騎士団へ入ろうとする。その理由は一族の者で騎士の肩書きを持たなかつたと言う悪い意味の例外になりたくないと言うプレッシャーと、自分の実力は正しく評価されていないだけだと言う淡い希望による物だ。

実際、前者は兎も角後者は間違つては居らず、入団試験に於いては優秀な成績を残しており、親のコネクションを使わずとも合格ラインには届いている。更に付け加えるならば騎士団に入り、実力を発揮して無辜の市民を守れば自分の評価は変わるんじゃないかと言う悲壮な思いもそこには存在した。

しかし、この入団試験の最後に今期入団希望者同士の實力把握と言う名目の模擬戦で当たってしまったのが主人公であり、孤児院出身と言うだけで相手を侮ってしまった結果、圧倒的な實力差を見せつけられて敗北する。

この出来事がきっかけでルークスの姿が才能の格差を見せつける家族と重なって見えてしまう様になつた事に加え、後に合格通知を父に報告しに蜻蛉返りした彼に浴びせられた『お前の實力では口利きも無しに騎士団入りが出来る訳が無いだろう？ 自分の實力だと勘違いするな』と言う言葉によってルークスを一方的に恨む様になつてしまつた。

—— 運命の旅路は寄り道を許さない。その証拠に、この世界でも既に根回しが済んでおり、ファイルの入団試験は形だけの出来レースとなっている事を知らない。

—— そして、主人公と当て馬ルックスの対決ファイルもまた必定。

—— 『原作』と呼ばれる神の手によって敷かれたレールの上をゆつくりと動き出すのだった。

功夫之肆

フィル達が住むこの国は『アルケー王国』と言い、始まりの地とも呼ばれる人類最初の国家として歴史を刻んでいた。

その為、皇国の守護者たる『アルケー騎士団』は国内外からの人気・名声共に高く、その入団試験の倍率は非常に高いとされており、この時期は皇国の城下町は人でごった返している。

城壁に囲まれている所為か、心なしか人口密度による精神的圧迫感を感じるフィルは人混みの中を酷く鬱陶しそうな表情を浮かべながら歩いて行く。

家庭環境によつて人間嫌いの節がある彼にとつて、この街中の移動は存外にストレスが溜まる物であり、本来ならこの時点でかなりの精神負荷が掛かっている。

『原作』ではこのストレスがとあるキャラクターに対してかなりキツめに当たる要因になるのだが——十年の功夫の為か此処でほんの少しだけ運命が変わった。

試験場までの通り道。例年通り入団希望者達によつて活気が湧くこの場所は試験前

の腹拵えを目的とした簡単な出店が出回っており、道行く者達に売り子達が呼び掛けを行なっている。

その声は四方八方から聞こえており、それがまた彼のストレスを増やして行く。その為に集中力が散漫となり吸い寄せられるように人混みに押された少女がファイルとぶつかった。

この時彼女は手にパンに溶かしたチーズを乗せて薄切りの焼き肉を乗せたファストフードの様な物を握っており、それをファイルの服にべったりと貼り付けてしまった。

当然、彼女に悪意があつた訳では無い。人と人がすれ違う時に肩がぶつかりそうになるくらいには場が賑わっており、棒立ちしているだけで邪魔になるような状態だ。この様な事が起きたとしても仕方の無い事だろう。

『原作』では、この事に腹を立てたファイルはいきなり彼女の頬を張り飛ばすと、そのままあしざまに罵つてから試験場へと向かう。それはストレスの発散と同時にピリピリしている所に物見遊山人間がいる事へ対しての苛立ちから来る物だったのだが、この世界のファイルはいきなり手を挙げる事はしなかった。

じつと自分の服に張り付いたファストフードと、きよとんとした顔の少女を鷹の様な

鋭い目で交互に見やる。

赤眼赤髪のセミロング、非常に整った顔付きだが間の抜けた様な顔をしているが、何処となく飢えた獣の様なギラギラとした雰囲気纏っており、一目見て自分とはタイプが合わない人種だとフィールは悟った。

一瞬。無性にこの名前も知らない少女の顔を張り倒したくなかったが、これから騎士団の入団試験を受けるのだからある程度緊張感を持つていなければならず、周囲の喧騒によつて視覚・聴覚による情報取得が出来ずとも、このくらいは捌かなければ行けなかった。そう、彼は内側から湧き上がる衝動を精神力で振り伏せる。

「……………この程度のアクシデントでイラつくなんて、功夫が足りないね」

「……………よくわからない。けど、ごめん？」

深い深呼吸と共に零した一言。それは誰かに対して言ったセリフでは無く、自分自身に言い聞かせるような物であり、目の前のタイプの違う少女に向けた物では無い。

だからこそ独り言だったのだが、それが却つて会話を生むだけの時間を作ってしまった。

小さな『イベント』しかし強制力は働いており、彼の目に映る少女は愛らしく見える

が、どこか感情の起伏が乏しい様にも見えて、人間嫌いである彼からすれば張り倒した
いほど自分に『合わない』と感じていた。

その為、ファイルは謝罪を無視して会場まで向かおうとしたのだが、その前に先程の少
女がその袖を引く。

「何だよ？ 生憎僕はお前みたいなヤツと関わってる暇が無いんだ。謝罪ならもうい
いからどっか行つてくんない？ 邪魔だからさ？」

「……………貴方に、用は無い。忘れ物、取りたいだけ」

間を置いて言葉を区切りながら話す独特な喋り方のその少女は、そう言つて
チーズ[※]によつて張り^れ付いていた焼き肉^物に手を伸ばそうとする。

なんだかんだで良いところのお坊ちゃんであるファイルはその行為が全く理解出来ず、
思わず棒立ちしてしまふ。

そして再起動した頭が下した判断は——他人の服に張り付いて道ゆく人の土
埃で汚れた焼き肉を食べようとする少女を止めると言う至極真つ当な事だった。

この世界に於ける貨幣は原作設定を引き合いに出すならば銅貨・銀貨・金貨のオーソドックスな物であり、日本円換算で銅貨10円・銀貨10万円・金貨10億円と言う物となり、物価もそれ相応。従って金貨や銀貨は中々見る事は無く、基本的には銅貨を持ち歩く事になる。

各硬貨も多少の区分けがされており、10枚分の一乗硬貨、100枚分の二乗硬貨、1000枚分の三乗硬貨と言った風にある程度は硬貨の重さを緩和させられる様にはなっているのだが……フィルの財布はそれらの意味とは別の理由でその重みを失っていた。

あの後、頑なに焼き肉を口にしようとする彼女を止める為に『腹が減ってるなら僕が奢ってやるからそれを捨てろ』と言った事が運の尽き。

乏しい表情ながらも目を若干輝かせた彼女はその言葉に従った……のだが、彼女は一切遠慮する事なく出店の料理を片っ端から食べて行く。

『原作』ではフィルは親から貰える小遣いで散財祭りだったのだが、この世界の彼は『そんな暇あるなら功夫を積む』な思考だった為、それなり以上にお金は持っていた筈だった。

流石に全額持つてきている訳じゃ無かったが、銀貨が3枚は入っていたから少なくとも

も儉約すれば数ヶ月は生活出来る、それがこの少女一人に食い潰されたとあつては苦笑いしか浮かばないだろう。それほど異常な食欲。ファイルも一瞬その異常性に思考を回そうとしたが、深く他人と関わる気が無い為にその違和感を四散させる。

「……満足」

「銀貨3枚分食つて満足してなかつたら今この場でお前を殴り殺してるよ」

若干——いや、かなり殺気を込めた物言いだ。疲れた様にため息を溢すファイル。

試験にはまだ余裕があるから遅刻の心配は無いが、精神的な疲労感がファイルを襲っており、万一遅刻しない為にも今は会場の側に生えている木の根本に腰を下ろしている。

それもその筈、周りから見れば年若い男女がこの時期に出店を周り、男が女の食欲と赴くままにお金を出す。恋仲、或いは気を引こうと貢ぐ男に見えたのか、店員に幾度となく謎の励ましや憐れみを受け続けていたのだ。途中から反論するのが面倒になり、好きに言わせていたが過去の辛い鍛錬の日々を振り返つたとしても彼は今日この日の疲れには絶対に勝てんと断言出来た。

「……ノーヴァ」

「はあ？ 何それ？」

「名前、私の。貴方のは？」

「何で僕が今日この日限りの関係の人間にそんな事教えなきやいけないんだよ。しかも奢りだからって遠慮無しに食うヤツだぞ？ 万一今後があるとしてもお引き取りください、だっての」

ヒラヒラと手を払いながら嫌味を含めてそう言い放つファイル。彼からすれば彼女は確かに見目麗しく、体付きも出るところは出ており、肉体美も整っているものの、単純に苦手な性格・手合いであり、関係をこれ以上持ちたくなかった。

……のだが、チラリと鷹のような鋭い目でノーヴァの顔を見ると、何処となく悲しそうな顔をしており『……そう。ごめん』と小さな声で謝っており、その姿を見た彼は苛立ちを発散するかの如く、舌打ちをしながら頭をガシガシと掻く。

「——ファイル」

「……名前？」

「何で僕が僕以外の奴の名前を名乗らないといけないんだよ。ま、今日限りの関係になるだろうし、覚えなくて良いよ」

——そんな風に刺々しく自分の名を名乗った彼だったが、ノーヴァはその態度に気を悪くする事なく、名前を覚える為か何度もフィルの名前を口にする。

そんな彼女の様子を見て、同年代の見ず知らずの少女に名前を呼ばれている事に気が付いたフィルは思わず気恥ずかしさから顔を逸らす。

その為、彼は見落としてしまった。そんなフィルの横顔をまるで好奇心丸出しの動物の様な雰囲気で彼女が眺めている事を。

功夫之伍

——ノーヴァと言う少女は『魔法』と言う力の被害者とも言えた。

この世界の魔法と言う力は魔素と呼ばれる素粒子を利用し、物理的な現象を特殊なアプローチで引き起こす力であり、この力を行使する為に必要な物は魂の力と定義されている。

現実の世界にも魂の重さが21gであると言う話が存在する。この数字の真偽や正誤は兎も角として、この世界に於いてはこの数字は現実の物であり、魂と言う物質が物理的な物として存在していた。

そして魂を構成している物質はエーテル体と呼ばれており、エーテル体は魔素同士が四つ結合する事でその形を作り上げている。

また、魂と精神力は密接な関係を持つている事が確認され、魔法と言う技術を使用する為にはこの四つ結合しているエーテル体から精神力によって切り離された一部の魔素と、周囲の魔素を結合させる事が必要であり、物理現象へ魔素を仲介したエーテル体の繋がりを持つ事で、精神力による思考の反映を行い、現実の現象として引き起こす事

が可能である。

前置きが長くなったが、要約すれば万能ではあるが全能では無い力。それがこの世界の魔法であり、物理的な要素を完全に無視する事は出来ない。

——だからこそ、ノーヴァと言う少女は被害者と言えるのだ。

彼女の母親はとある港町に住む宿場の従業員であった。

その町は歴史が古い訳ではなく、偶々船乗りが漁をしている際、海流に流された事がきっかけで新大陸を発見し、海路を模索した結果、橋頭堡として作られた場所である。

その為、町と言うよりは拠点や輸出入を管理する場所と言う意味合いが強く、それでいて金銭が大きく動く稼ぎ場となっていた。

目の回る様な忙しい生活の最中、ノーヴァの母は新大陸を調査する先遣隊の美丈夫と恋仲となり、子供を身籠る事となる。

——此処までは幸せなラブロマンスである。しかし、問題はこれから。

恋人と体を重ねてしばらくが経った後、彼女は不注意によって怪我を負ってしまい、先遣隊に付き従っていた医師によって治療魔法を受けた。

突然だが、現実の世界では妊娠中の女性は薬品を使用する場合、注意が必要な事はこ

存じだろうか？

それは薬品の成分が血中を辿り、胎盤を通じて胎児へと影響を与える為に麻薬性の成分などを使用する事が厳禁とされている。

さて。ではこの世界に於ける魔法と言う力は、妊婦を通じて胎児へ影響を与えない安全な物なのか？

答えは当然NO。この時医師はしつかりと妊娠の有無を聞いており、彼女も自覚症状が無かった為に妊娠中ではないと思ひ込んでいたのだが、既に彼女のお腹には受精卵が着床していた。

魔素と言う力の性質上、魔法は胎児に対して悪影響を与えるとされており、良くて先天的な障害、最悪死産もあり得る物である。

受精卵の状態で魔法を浴びたノーヴァは死産こそ免れる事が出来たものの、それによつて人間とも魔獣とも呼べない身体で産まれる事となつてしまった。

肉体を構成する要素として、魂だけでなく細胞単位で魔素を取り込んでおり、その恩恵として人智を遙かに越えた異常とも呼べる身体能力を有する怪物。

それがノーヴァと言う少女であり————後世の研究で判明する魔素による先天的障害の一例『餓鬼』である。

彼女のような存在は研究が進んだ後の世代には魔素被害者或いはその影響を受けた

人類として、『魔人』と呼ばれる一種の障害者として認識されており、専用の魔法薬ポーションによる体質改善も可能なのだが、時代が悪かった。

彼女の様に一見して障害のない人間のような魔人は症例が少なく、周囲も両親も彼女が離乳期に入るまでその事に気が付かなかったのである。

そもそも先天的障害を持つ者は口減らしの対象となりその幼い命を散らせるのが開拓時代の常識。しかし、ノーヴァは悲劇的なことに生き残ってしまった。

ノーヴァは物心ついた頃から常に飢餓感に苛まれており、摂食が可能な物は本人の意思とは関係なしに口へと入れていた。

この原因は彼女の肉体に存在する。

ノーヴァは外見こそ人間となんら変わりのない姿をしているが、これは母親が人間であり、その胎内で順当に細胞が構築されたが故に人間の姿で産まれたからである。

しかし、細胞単位で注目すれば最早人外の領域に達しており、その体と身体能力を維持する為に大量のカロリーと魔素を必要としていた。

彼女の肉体は凄まじく、年齢が一桁でありながら横殴りの拳一つで熊型の魔獣を肉塊に変えるだけの膂力と、反応すら許さない瞬発力を持ち、無機物以外は100%消化吸収が可能で排泄すら不用な消化器官を有しているが、最悪な事に遺伝的要因で脂肪等が非常に付き難い体質となっており、胸元こそ母親並みにはなったが、カロリーの消費を

カバー出来る身体にはならなかった。

望まぬ力の代償に大量の食料を必要とする人の姿をした怪物。更にタチの悪い事に、彼女の脳も異常な性能を持っており、全分野に対してサヴァン症候群の如くに思考を深める事が出来る。

——ただし、本人にすらその深慮は制御不能であり、思考を深める事で頭痛と発熱が必ず発生すると言う欠点を持つが。

この為、彼女は人語を理解していても、間を置いた途切れ途切れの話しか出来ない。普通に会話すれば脳が構築した会話のフローチャートを止めどなく、一方的に相手につづけることになる上にその大半が会話を先読みし過ぎた結果理解不能な内容しか口にする事が出来ず、そもそも会話が不能。

思考そのものが頭痛と発熱を誘発し、それが過ぎれば脳細胞が死滅する危険性が存在する為に彼女は思考が実質不可能となり、人形の生活を送りながら飢餓感に耐えている。正に障害。この時代では病や呪いとも言えるだろう。

それが変わったのは町長が彼女の存在に気が付き、周囲の魔獣を狩らせる事を提案したからである。

彼女の母親は娘を^{怪物}恐怖しながらも親の情によって手放せなくなっており、それが理由

で夫と離婚していた為、食費の負担を解消する為にその提案に乗ってしまった。

その日を境にノーヴァは命令された通りに町の周辺の魔獣を狩り始める。

町長によつて人間を間違つて襲わない様に最低限の常識を鞭打ち等の畜生へ行うような調教によつて覚えさせられ、朝も昼も夜も無く魔獣と戦う毎日。

モラルも、マナーも、その体と頭脳の欠点が原因で身に付かない。最初はその身を案じていた母親も、返り血だらけで塵殺した魔獣の素材を引きずり、睡眠のためだけに帰つてくるノーヴァへの恐怖が次第に愛情に勝る様になつて行き、話しかけてくる事が少なくなり、段々と居ない者扱いへと変わつていった。

それでも彼女は何も言わなかつた。辛いと感じたら連鎖的に思考が回転し、熱を帯びて頭痛を帯びる。だから、考え無い。

寂しいと感じたら孤独を連想し、さまざまな恐怖を思い描き額が熱くなる、痛みでも考えられなくなる。だから、辛くも寂しくも無い。

だが、畜生の様に扱われ、戦いの道具として使われる毎日に何も考えていないはずの彼女の瞳からは涙が流れていた。何故流れているのかも考える事ができない。

そんな毎日を過ごし、調教で覚えさせられた周囲の魔獣の金になる部位を残して他の血肉を食つていた彼女だが、物事には終わりが来る。

——町の周辺から、魔獣が消えた。

原因が分からない。考えようとする^と熱が出る。頭痛がする。だから分からない。分からないから母親に聞きに行こうとした。産んでくれた母親が彼女は好きだったから、行こうとしたのだ。

逆らうつもりも、襲うつもりも、そもそも危害を加えるつもりも、何一つなかった。母親の前ではお腹が減っても我慢した。空腹でお腹が痛くても頑張つて我慢していた。ノーヴァは自分が異常だと自覚しながらも、母親の為に周りに合わせようとしていた。

朝ご飯も、昼ご飯も現地調達出来なかった彼女は飢餓感と空腹による苦痛を堪えながら、母親にどうしたらいいのか聞きに行く為におぼつかない足取りで家まで帰り、玄関を開ける。

目に入って来た光景は首を吊った自分の母親の姿であった。

遺書らしき物にはノーヴァを娘として見る事が辛くなったと言う内容と、今まで彼女を育てるにあたっての苦労が恨み言のように並んでいた。しかし、ノーヴァはそれを深く考える事が出来ない。

代わりに、彼女は動かなくなった母親を『とても美味しそうだ』と、そう感じてしまふ。

内側から沸き立つ恐怖に全身に鳥肌が立ち、その感情を塗りつぶす様に頭痛と発熱を

堪えながら思考を回し、泣きながら町中に駆け出して行く。

医者を呼ぼうとした。しかし、彼女の体を知る町長はその姿を見て人間を食いに来たと誤認してしまった。

何故なら町周辺の魔獣は数年掛りとは言え彼女が一人で喰らい尽くしてしまった。その狩りの様子や範囲が広い為に弱い魔獣は逃げてしまい、強き魔獣も淘汰されている。第三者から見れば食料に飢えた怪物が襲いに来た様にしか見えなかったのである。

自警団や市民からの投石や攻撃に反撃する事なく逃げ出したノーヴア。しかし、彼女はどうかすれば良いのか分からずにふらふらと魔獣狩りをしながら各地を放浪した。

そのルーチン以外の事を知らず、それ以外の生き方が分からないが故の魔獣狩り。食料では無い荷物を運搬するキャラバンの護衛として、知識としては知っている硬貨と言う物を集めながら生きていたが、そんな最中に優しかった頃の母親の夢をみる。

『ノーヴア。貴女は他の子とは違うけれど、私の大切な子供よ？ 今はまだかもしれないけど、きっと貴女を理解してくれるおともだちが出来るわ。だから、心配しない？』

町にいた頃に遠巻きに他の子供達が遊んでいる姿を見ていた時にお母さんが言ってくれた言葉、涙を流しながら目を覚ましたノーヴァはキャラバン達の目的地である『アルケー王国』へ入国する。

——お母さんが言ってた。私と、ともだちになってくれる人、本当に居るのかな？

こうして彼女は護衛を全うすると同時に屋台等で今までの稼ぎを切り崩しながら城下町を見て回るのだった。

功夫之陸

『原作』に於いて主人公であるルークスは軽い手荷物を片手に試験会場へと足を運んでいた。

その男の顔の仕草には一切の緊張感は見られず、孤児院で支給された服を着崩しながら鼻歌すら歌っており、まるで遊びに来た様な雰囲気醸し出している。

彼からすればこの試験を受けに来る内の何割かは実戦経験を持たない騎士の子息が多く、余程の名門の者でもなければ魔獣狩りで孤児院の家計を助けていた自分が負ける訳が無いと考えていた。

実際、毎度毎度玉石混淆の試験となる為、身分の低い人間が相手だからとタカを括つて落ちる輩が多く、幼い頃からそんな者達を見ていた彼からすれば緊張感など持てるはずも無かった。

「ひゅー。年齢制限の所為で参加すんのは今日が初めてだけど、去年より増えてんじゃねーかこれ？ やっぱ新大陸が見つかったからかねえ」

やれやれとため息を吐きながら一人そう呟くルークス。側から見れば凄まじく危ない奴なのだが、本人はどこ吹く風。一応見とくかと言うノリで周囲の参加者の様子を感じと見直し、面白そうな奴は居ないかとそれとなく探る。

『原作』ならば彼の視界内にいる参加者はそのお眼鏡に敵わず雑魚認定され、楽勝ムードのまま試験に望み、実際に最優秀成績を残して鳴り物入りでアルケー騎士団へと入団するのだが、この世界では少しだけ差異が生まれた。

(ん？ あそこの赤い髪の女と一緒に居る奴……他の雑魚とは空気がちげえな?)

それは天才故の肌感覚と、実戦を経験しているが為に感じる独特な雰囲気。服装や振る舞い、他の貴族の子息らしき人に横柄な態度をとっている事から察するに、それなりの名門の生まれなのだろう。

一見すれば雑魚認定されてもおかしくなさそうなのだが、頭の上から足の下まで見れば体幹がしっかりとしていて全く身体が揺れていない。何故か上着を脱いでいる為に、その体つきも肌着を透かして推定出来る。

(ありやなんかやつてんな？ 剣術……てよりは武術の類か？ それもちつとやそつとじゃねえぞ、あの身体付き)

楽勝ムードで試験に臨めると考えていた矢先、随分と興味を引く相手が現れたと思

わず笑っていたルークスだったが、その視線を感じ取ったのか、赤毛の少女が子息達の挨拶回りが終わったたであろう隣の少年の袖を引く。

「……フィル。あれ。見てる」

「はあ？ あの服孤児院で支給されてる奴じゃん。貧乏くさいのが移るからこつちみんなよ」

馬鹿にした様にそう手をヒラヒラさせるフィル。彼からすれば何故かノーヴァが自分にくつついてきており、更にはおべつかを使い、下級騎士の子息達が媚びに来ていた為、ストレスの吐け口としてそう突き放す様に言葉を放つ。

『原作』との差異。それはフィルの居る位置が違う為に起きた『主人公』との出会いのほんの僅かな時間の前倒し。

些細な違いだが、しかしその差異は実際強制力が絶妙に働かない内容であり——故にルークスの動きは彼の性格に準じたものとなった。

「そう冷たい事言うなよ。同じ試験受ける仲間だろ？ 俺ルークスつつーんだ。よろしくな!!」

相手の悪態を全く気にする素振りも見せず、距離を詰めながら自己紹介をし、あまつさえ握手まで求めてくる。また意味のわからない相手が絡んで来たのかとイラついたのか、ファイルは思わずその手を全力で払う。

「馴れ馴れしくするなよ、孤児院の捨て子が。僕はキミと違って家名を背負ってるんだ。住む世界の違う相手になんでこの僕が気安くする筋合いがあるんだよ？ 僕の前から消えろ」

その言葉は何時にも増して辛辣。それもそうで、ノーヴァの手前決して態度にも表情にも出さないが、ファイルはかつて無いほど緊張していた。

それは劣等感からくる僅かな不安と、試験会場の喧騒と熱気に当てられたが故の物。内側から背筋を伝い、痺れる様な感覚が体をなぞっていく。心臓の鼓動が速くなり、脈打つ感覚が嫌にハッキリ聴こえて鼓膜に違和感まで感じる。服の下には冷や汗まで出ており、彼は明らかに会場に吞まれていた。

そんなファイルの一撃を食らったルークスは『おお怖い怖い』とおちゃらけながら言いつつ、にっと悪ガキの様な笑みを浮かべる。

「ま、どっか行けってんならいくけどよー。——緊張で實力出ませんでしたは無
しだぜ？」

その言葉を言い終わるや否や、ルークスはごく自然にフィルの間合いに入り込み、軽
く胸元を叩く。

この一連の動作があまりにも自然体に過ぎた為、フィルは思わず反応が遅れてしま
い、まんまと間合いを取られてしまった。

孤児院出身者にこうもあつさり、それまであつた緊張感は吹き飛び、一瞬空白となつ
た思考の所為でルークスが家族の姿とダブって見える。

その瞬間沸き起こる劣等感と才能への嫉妬。この男はあの人達と同じ人種天オだと確信
したのか、それまでの不安や弱気が一気に消し飛び、反骨精神がその心を満たす。

ルークスはフィルが緊張している事を直感で見抜いており、武芸者であろう彼への挑
発として先程の行為を行ったのだが、この行為を行った理由は二つ。

まず一つ。試験で競い合う相手が欲しい。

この時代の騎士団の試験は身体能力テストが主であり、学が無かつたとしても身体の

動きがすっかりしていれば合格が可能である。ただし、その合格ラインのハードルは非常に高く、雑魚相手に無双するのもつまらない。

次に二つ目。同年代のそれなり以上に出来そうな気配を持つ男と正面切つて戦いたい。

試験後の模擬戦は毎年の見ものであり、今年は自分も参加する気満々だったから本気でやれる相手が欲しかった。所謂スイッチが入ってしまったと言うところだろう。

傍迷惑な気配を感じながら、ファイルは去つていくルークスの後ろ姿に深いため息を溢すのだった。



騎士団の試験は身体能力テストであり、基本的には魔素操作による身体の魔力強化は禁止されている。

それ故に、情報伝達の遅れなどの問題から、皇国周辺ならば兎も角、そこから遠く外れた辺境からの志願者達の中にはそれを知らなかった為に試験開始時点で規定の能力に届かずに即不合格になる者達も多い。

『原作』のフィルは一応素の身体能力で合格ラインに届いていたが、試験結果で言うなら『良』でなく『可』と言ったところ。雑魚認定された者達よりは頭ひとつ抜けているがそれだけ、それが『原作』のフィル・ラントだった。

だが、この世界の彼は『原作』の彼とは違う。

試験前に掛けられた発破によって反骨精神を蘇らせた彼は、早々に脱落した失格者達田舎者を鼻で笑いながら自分の出番を迎える。

ギャラリーの中にはノーヴァが混じっており、無感情な目を向けてきているが無視。そもそもこの試験内容に余計な事を考えていられない。

内容は人工的に作成された『遺跡』攻略。一見、二階建ての簡単な作りの砦なのだが、木製のマリオネットと石製のゴレムが内部に存在し、道中の罠と敵を掻い潜りながら頂上の旗を上げ下げする事が主な内容となる。

ただし時間制限が存在しており、巨大な砂時計の砂が落ち切る前に目的を達成しなければならぬ。

——張り切るフィルだったが、既に父親の根回しによって彼の試験は他の参加者に比べて緩い物となっている事を彼は知らない。

そんな裏事情が含まれながらも、始まった試験。その結果は『原作』のファイル以上だった。

まず『原作』の彼は親の下駄履きによつて緩くなつた試験内容であつた為、エネミーの巡回ルートが比較的甘く、スニーキングミッションでクリアしていた。

『原作』の彼も下駄履きが無くともクリア可能な実力は持っていたが、何度か見つかつていたのを術者が見て見ぬフリをしていたと言うのもあるので、完全に実力一本だと楽な合格だったかは怪しいが。

比較してこの世界のファイルの試験はと言うと、まず支給品の槍を携えて正面から侵入した直後に不意打ちでマリオネットを一機粉碎。この時の槍捌きが早すぎた為に術者が一切反応出来ず、感覚の途絶えたマリオネットから事態を察した。

しかし察したといつてどうにかなる物でも無く、次々と木製のマリオネットが破壊され、正面突破で二階へと上がる。

砦の構造は試験がタイムアタックの為に一本道であり、二階から罠やゴーレムが動き出すのだが、ゴーレムは鉄山靠で転倒させ、罠は神経を集中させる事で最短距離を突き進む事で突破する。

下駄を履かせる必要の無い速度と身体能力。知らぬ者から見れば確かにそう見えるのだが、彼の家族を知る者からすれば話は別だった。

(……やはり劣るな)

本年度の試験官は内心でそう眩きながら、試験内容を魔法によってチェックする。確かにフィルの動きは素晴らしいの一言に尽きるが、ラント家の才能を知る試験官の男からすればやはり期待外れに見えた。

しかし、これは『名門であるラント家』と『天才の家族達の末弟』と言う過度な期待から生まれた過小評価。

槍捌きの素早さ、威力、鋭さを見落とす、支給品では破壊できず魔素の使用が縛られて居るが故に石製のゴーレムに対しては鉄山靠での体勢崩しによる投げを選択する判断力に気付かない。

『原作』の『ストーリー』による強制力。ラント家の出来損ないと言うレッテルはフィルの存在に深く因縁付けられており、それ以上の好転を許してはくれなかった。

旗の上げ下げの合図を見ながら、試験官は憐れみと侮りが混じった視線をフィルへと向ける。家名に対し見劣りのする騎士が生まれてしまったな……と。

しかしこの直後、そのような複雑な負の視線は一人の少年によって吹き飛ばされる。

「んじや、やりますかねえ!!」

その少年の名前はルークス。支給品の長剣を携え、鼻歌混じりに内部へと入って行き、史上最速の記録と共に内部の全エネミーの撃破と言う鮮烈なデビューを果たし、直前のファイルの活躍を自分の才能で上書きしてみせるのだった。

功夫之漆

試験過程が終了し、合否の発表の前に受験者達による模擬戦が始まる。それは生の動き同士で戦う事で、瞬時の判断能力や反応速度を測り、受験者達の格付けを行う意味も兼ねている。

その為この模擬戦自体で試験結果が変わるなどと言う事は余程の事が無い限り起きないのだが、今後の進路には大きな影響を与える物であり、試験に合格したからといって気を抜く事は出来ない。

——だからこそ、ファイルは目の前で対峙するルークスの事を最大限に警戒していた。

明らかな強さを持った天才。それも自分の強さを自覚し、それに絶対の自信がある人間。ファイルの嫌いな類いの存在であり、どうしてもその姿は家族達のそれと重なってしまふ。

模擬戦の組み合わせ表は札引きで決まる物だった為、この組み合わせはファイルからす

ればたまつたものではなかつたのだが……。

模擬戦用の木製の長槍を握る手に力が籠る。彼に負けると言う事はまたあの惨めな気分を味わう、そう考えたファイルはその鋭い視線でルークスを睨んだ。

その視線を受けたルークスはニヤリと笑い、その視線を切るかのように木剣を縦に一閃する。

その動き、振り抜かれた軌跡から武芸者であるファイルの目は十分に相手の实力を測る事が出来た。

（軌跡にブレがないし体幹もしつかりしている、けどそれが見ただけで理解できる辺り、この男の实力は相当な物……これだから天才って奴は嫌いなんだよ）

だが、その評価に付け加えるようにファイルは続ける。——楽勝とは言えないが、勝てない程では無い、と。

それは両親や兄達のように長い年月戦いの中に身を置いているのなら兎も角、同じ年代の天才相手ならば十年の功夫を積んだ自分の方が上である、と言う自己分析から来る判断。

「ま、お互い本気でやろうや」

「本気？ 何言ってるんだよ、僕は槍。キミは劍。知ってる？ 槍に劍で勝つ為には三倍の実力が必要なんだってさ」

挑発を行う事で『天才』への苦手意識を抑え込みながら、ファイルは試合開始の合図と同時に槍を放つ。

——風切り音と共に残像が発生する程の鋭い刺突。様子見の一撃として放たれたそれは軽く打っているにも関わらず、常人では目視で捉える事すら出来ない速度と重さを持っており、ファイルの実力の一端が見える物である。

しかし、目の前の男はその刺突に対して横薙ぎの一閃を完璧に合わせ、鋒を弾くと同時に踏み込む。

槍の鋒よりも下に身体を沈ませる事で狙いをつけさせる事を狙った上での行動だったのだが、ファイルはバックステップで踏み込まれた分の間合いを改めて取り直す。

(チツ、今の一撃をノータイムで反応してくるのか。一筋縄じゃいけないのは理解してただけ、予想以上に反応が良いね)

(……弾けはしたが、想像以上に重い一撃だな。手が痺れてやがら)

お互いに間を取った結果、先程の一合の打ち合いへの思考が周り、二人の表情が変わった。

特に余裕のある雰囲気を出していたルークスの表情は真面目な物へと変化しており、余裕の鼻っ柱をへし折る気だったファイルは舌打ちをする。

ぞわりと背中を這い上がる天才への劣等感。それを体内から吐き出す様に短く息を吐きながら、流れる様に三連突きを放ち戦いの主導権を奪いに行く。

積極的な攻めの姿勢にルークスも一旦見に戻る。一発目、二発目を半身を逸らすだけで回避し、三発目の刺突に合わせて間合いを埋めようとほんの少しだけ腰を落とした。

その動作を目視したファイルは、三発目の刺突の直後に欄を放つ事でその踏み込みを潰す。鞭の様にしなった槍の腹がルークスを襲うが、反射的に木剣を差し込む事でそれを防ぎ、そのまま相手が少しでも力を抜けば槍を弾き飛ばせるように、刀身の腹を滑らせる様に力を込めながら走る。

こうする事でファイルに槍を抑え込ませる事を強要しつつ、足捌きによる間合いの確保を妨害しにいった。

しかし、槍の半ばの位置にまで到達したあたりで不意に槍を抑える力が弱まる。好機と感じた彼はそのまま力づくで槍を弾くと、そのまま一気に踏み込み——石突に当たる部分で顎を弾き上げられる。

(野郎ツ!!? 味な真似しやがる!!)

ファイルは腕力勝負に持ち込まれた際、焦りはしたが押し引きの二択を迫られた事に対して、仕切り直しをするよりもそれを利用した方が良いと判断し、敢えて弾かせる事で槍自体を回転させ、石突を使ったカウンターを行った。

流石に予想外の一撃だったのか、追撃を躲す為に横つ飛びする事で距離を開けるルークス。

良い様にあしらわれている様に見えるが、その顔に焦りなど無く、寧ろ笑みまで浮かべていた。

(ハッ、外野は『ラント家の落ちこぼれ』とかなんとか下世話な事言ってたが、やるじゃねえか。やつぱ他人の評価ってのは宛にならねえわ)

そう言つて、チラツと一瞬だけ外野へ視線を向ける。試験場の広場を舞台にした模擬戦は一種の娯楽であり、一般人もまた会場の外から遠巻きにこの戦いを見ている。――

——当然、孤児院の子供達も。

（へつ、一丁前に心配そうなツラしやがつて、ちやんと見とけチビ共？ お前らのいいちやんは強いんだからよ。）

意識を切り替えたルークスは立ち上がり、気合いを入れる為に短く息を吐いた後、身を低くしたかと思うと、次の瞬間にはその場から消えていた。

瞬間的な踏み込み、それも視界による認識が完了する前に相手の射程距離まで間を詰められたファイルは完全に反応が出来ておらず、下からの逆袈裟斬りによつて弾き飛ばされるのだつた。

▽

何が起きた!? それがファイルの頭に真つ先に浮かんだ言葉であり、次いで自覚したのは斬撃がなぞつた部分の熱感。切れてはいないようだが、痛みが滲んでおり、一撃を浴びた事が分かつた。

(クソツ!! 僕は気を抜いてた訳じゃ無い!! 対等にやり合ってた筈だ!! なのになんで!?)

混乱する思考。しかし槍を手放しておらず、行動不能とまでは行っていないダメージの為、意地で立ち上がって槍を構え直そうとして、追撃の一撃が飛んできている事に気が付いた。

踏み込みから勢いを殺さないようにルークスはフィルを蹴り飛ばす、ただし死亡しないように手加減を加えているのか、弾き飛ばされたフィルはなんとか受け身を取る事が出来たが、内心に溢れていたのは屈辱だった。

その気持ちを押し殺す様に刺突の雨をルークスへと向ける。常人にはハリネズミに見えるほどの早さであり、彼を串刺しにしようとしたが、その全てを見切られた上に先程行った欄による不意打ちすら防がれる。

槍捌きが全く届かないどころか、更に数閃の斬撃がその刺突の雨を掻い潜る様にフィルの体を打ちのめす。

反応が追いつかない速度。当たらないのに一方的に当てられる。この感覚は嘗て家族と行っていた『訓練』を嫌でも思い出す。

魔法の理論も、戦い方も、その全てが才能を前提とした指導であった事、分からないところを聞けば何故分からないのかと言う疑問が投げ返されたあの劣等感を。

(あの時の目が!! 口振りが!! 一々頭によぎるツ!! 僕は……僕はツ!!)

たった数分、ルークスが本気で攻勢に出ただけでフィルの体にはダメージがかなり蓄積しており、弱気になった心が膝を突かせようとする。

しかし、脱力していく心とは裏腹に重ねた十年はそれを許してくれない。心の弱さに反して身体は『立ち向かえ』と言わんばかりに活力が漲って行く。

「……功夫が足りないね」

ボソリとそう呟いたフィルは再び弱気を吐き出す様に深く息を吐き出すと、槍を捨てて拳を構える。

「おい。孤児院の」

「おいおい、自己紹介しといたろ? ルークス。ルークスだよ。……良いのかよ槍なんか捨てて」

「槍じゃ勝てない、そう悟っただけだよ——フィル・ラント、今からお前を沈め

てやるからかかってこい」

周囲が揺れるほどの震脚を行い、ファイルはそう挑発する。

流石にルークスもファイルのその様子にいきなり切り掛かるような真似はしなかったが、ジリジリと間合いを詰めては行く。

息を呑む様な両者の圧力、拮抗状態となっていたこの場を動かしたのはルークスへの声援。孤児院の子供の一人が思わず口に出したその言葉に反応する様に彼はファイルに向かつて切り掛かる。

姿を見失う程の速さの踏み込み、目で追っていても先程の二の舞になると判断したファイルは、全神経を集中させることで自分の周囲に気を配り、背後の小さな物音に対して振り向き様に外門頂肘がいもんちようちゆうを浴びせた。

五感を研ぎ澄まし、極限下の集中から打ち出された外側から脇の下目掛けて打ち込む肘打ちである外門頂肘は手ごたえがあり、カウンター気味に突き刺さる。

しかし、木剣を犠牲にしてダメージを殺したのか苦悶の表情を浮かべながらもルークスはハイキックを浴びせ、ファイルの頭部を蹴り飛ばす。

頭に受けた衝撃で彼は一瞬意識が弾けたが、続けざまのボディーブローによって強制的に意識を覚醒させられる。

近接短打である八極拳では体を開けてしまえばリーチが短く打ち合いに不利になる、

その為槍による決着を望んでいたファイルだったが、零距离の乱打戦に切り替えた事が幸運にも彼らの才能差を埋めていた。

ルークスの足捌きは一級品であり、本気を出した彼が翻弄に徹すればファイルは手も足も出ずに敗北する。軽業師のように自由自在に動く彼は緩急つけたフェイントや、死角移動による姿隠しなど、簡単にアドバンテージをひっくり返す。

だが零距离の乱打戦なら足捌きは死ぬ。そして近接格闘であれば十年の長がファイルには存在し、扱うのは一撃一撃が重量級の一打。

ボディーブローで沈みそうになった身体を震脚とそれによって伝わる発勁で強引に立て直し、反撃の一打として内側から胸元へ打ち込む裡門頂肘りもんちようちゆうを渾身の力で叩き込んだ。

ドゴンツツと言う異常に重い音が会場へと響き、その一撃をまともに打ち込まれたルークスは身体が硬直する。

余裕が無いが故に放たれた手加減無しの一撃、本能的に魔力強化によって直撃する寸前にその一点だけを身体強化したのだが、その硬度すら貫く衝撃に肺の空気が全て吐き出され、身体硬直によって力が入らなくなった腰が落ちた。

ファイルはその隙を見逃すほど甘い男では無く、裡門頂肘でルークスが晒した胴体に向かって更に拳を打つ。

しかし、彼は自他共に認める天才。追撃を予想した上で頭突きを放ち、その衝撃によつて彼の拳を空振りに終わらせる。

互いにダメージが噴き出し、肩で息をする。進路の為のアピールならばこれで十二分に済んでいるのだが、フィルもルークスも個人的な理由から勝利を望んでいた。

フィルは家族の幻影を振り払う為、自分の十年間を証明する為、その拳を固く握りしめていた。頭部へのダメージによつて意識を集中していないと気絶してしまいそうであり、彼はそれ故に次の一撃で仕留めると強く覚悟する。

一方のルークスは裡門頂肘の一撃によつて迫り上がってきた胃液を無理矢理飲み込み、余裕が無いにも関わらず笑みを浮かべた。

それは挑発や侮りではなく———難しい事を考えずに声援を送る孤児院の弟や妹達を安心させる為の物。

ルークスが強さに自信を持つ理由はただ一つ。孤児院の仲間達が自分を一種の英雄視しているからだ。

この時代、口減らしや獣害龍害による人的被害など当たり前の様に存在しており、怪我を機に引退した騎士やフリーの腕利きなどがそう言った子供を引き取つて育てる事も珍しくない。

彼が育つた孤児院もその様な場所の一つであり、貧乏ながらも来る者拒まずの精神で

沢山の孤児を養っている。

弟や妹達の多くは親兄弟を魔獣によって亡くしており、夜に夢で魘されて泣いている姿もよく見ていた。

だからこそルークスは、こんな世界だからこそそんな不運や暗い雰囲気吹き飛ばす事が出来る男になりたかった。誰よりも強く、そして誰もがその背中に守られている事で安心できるような、そんな『最強』になりたかった。

だから、彼はファイルに勝ちたいのだ。実力を認めたいから、と言った意味合いではない。既に認めているからこそ、騎士になると言った時に不安な顔をした子供達をこんな強い男に兄である自分は勝ったんだぞと言つて安心させたい。そんな理由からルークスはファイルとの戦いを望んでいたのだ。

(……つつつても、本格的に芯をやられたか？ ギリギリ折れちゃねーけど、仕掛けられんのは一回切りつて見て良いな)

さてその一回の仕掛けをどうするか？ ファイルの扱う拳法の弱点は打ち合いの最中に理解出来た。ある程度距離を空けてリーチ差を利用した蹴り技主体の攻撃で行けば恐らく勝てる、勝てるのだが……ルークスは正面から打ち勝つと決め、相手の土俵へ飛

び込んでいった。

狙いはカウンター。相手の欠点を突いた勝利を掴むような勝利では目指す物には程遠い、少なくとも今は命のやりとりをしているわけでは無いのだ。綺麗事で勝とうとしても悪くはないだろう。

相手の様子を見るに同じ様に限界を迎えている。ならこちらから攻めれば被せる様に一撃を放つ筈、それを弾いて空いた顎を弾き上げる。

行動が決まったルークスはそのまま残った力で踏み込み、フィルの間合いに入る。射程距離に体が入った事からその重い拳が打ち込まれ、それを予定通りに逸らす、向こうももう片方の腕で拳打を打ち込んでくる。

瞬間的な攻防、しかしこの時ルークスは子供達の期待に応えようとするあまりカウンターを放つ事に意識を集中しすぎていた。

(よし、一二つ弾いたツ!! こうなったらもう俺のカウンターのほうが早いツ!!)

一瞬の思考に生まれた空白の隙。その合間に初撃で弾いた筈の手がピッタリと自分の胸の上に置かれており——次の瞬間ルークスの身体は天を見上げていた。

身体が砕けたと錯覚するような強力な衝撃、何が起きたのかは分からないが一つだけ分かった事がある。それは、己が負けたと言う事だ。

▽

『猛虎硬爬山』それは八極拳の中における絶招と呼ばれる実戦の切り札であり、その一撃によって彼は本来勝てる筈のなかつた相手を打ち倒した。

『運命』を捻じ曲げ、ルークスを打ち倒したフィルだったが、その表情は苦虫を噛み潰したような物であり、周りへの一礼もそこそこに、おぼつかない足取りのまま会場から外へと出る。

『天才』に勝つた。両親や兄達とは違うが、兎に角勝つたのだと言う実感それを噛み締めている——訳では無かつた。

寧ろその逆。猛虎硬爬山は切り札であり、こんな命のやりとりをしている訳でも無い戦いで晒すような物では無い。

それを、使つた。しかもほぼ反射的に使つたせいで不完全な形で。自分の意思で使つたならまだしも、無意識の内それしか勝つ手段が無いと内心で思っていた様で……却つて惨めな気持ちをする羽目となつたのだ。

あの場に居ればきつとルークスは話しかけてくる。それが容易に想像出来たからこ

そ、胸に澱む才能への嫉妬や家族への劣等感が搔きむしられそうだった。

「……功夫が足りないね」

溢れそうになる涙を乱暴に拭い、そう呟いたファイルはそのまま気晴らしの散歩をしに街の中へと消えて行く。

その姿を、試験官とは別の豪華な制服を着た人間が興味深そうな顔で眺めていた。

———ほう？ ラント家の末弟は使い物にならないと聞いていたが……存外にやるじゃ無いか。

運命に打ち勝ったファイル。そしてその大きな歯車を力技でずらした彼へ向けられている色眼鏡が今、一枚外れた。

功夫之捌

アルケー騎士団への試験翌日。結果を受け取り、報告の為に屋敷へ帰ったファイルへ投げかけられた言葉は『原作』と変わらず——ルークスとの勝負に絶招を放つてしまった事への憤りも合わさり、非常に荒れていた。

「クソツ!! クソツ!! クソツ!! 何が『自分の実力だと勘違いするな』だ!! 外門頂肘だつて!! 裡門頂肘だつて!! 死ぬ気で鍛錬積んだんだぞ!? 余計根回しな事しやがつてツ!! どう考えても僕の実力だろあのクソ親父がツ!!」

自室の中にある家具や調度品などを八つ当たりで破壊し、椅子を机に叩き付けたところでファイルはその怒りを何とか飲み下す。

父親からの評価は変わらない。それは頭の中にあつた筈なのに、実際にその通りになると胸の内に憤りと屈辱がヘドロの様に溜まる。

心の何処かにあつた息子として認められるのではないのかと言う淡い期待が砕けた

反動は劣悪な家庭環境とそれに伴う自己肯定力の低いファイルには取り乱す程の心の痛みであり、怒りを飲み込んだが故にそれを自覚してしまった事から悔しさと情けなさで涙が流れそうになるが、乱暴に目元を拭ってそれを防ぐ。

この後彼は配属先へ向かわなければならぬ。報告の為の一時的な帰宅である以上、早く礼服に着替えて身支度を済ませなければならぬのだ。長居する時間など無いのだから、当然涙など流している暇は無い。

ファイルの配属先は騎士団の中でも先遣隊として遠征や開拓地調査などを頻繁に受け持っている『マニユス隊』となった。これは本来の運命では配属されていない部隊であり、その任務内容から相応以上の実力を必要とされている部隊である。

隊長の名前は『マニユス・ソムニウム』。アルケー騎士団の中でも古株の老騎士であり、最前線こそ退いたものの、その実力と経験の豊富さから隊長として未開拓地域への派兵や調査を行う部隊を纏めている大ベテラン、そんな人間からの名指しの引き抜き。ルークスも勧誘されている事に少々思うところがない訳でもないが、それでも先遣隊は花形であり、実力を周囲に認めさせる格好の機会だ。

これでも認めようとしていない父親の事はもういい、現実を見ただろうとファイルは自分に言い聞かせながら意識を切り替えつつ、使用人に部屋の片付けを任せ、衣装部屋で礼服に着替えるのだった。



アルケー騎士団の兵舎。マニユス・ソムニウムに与えられた部屋の中で、彼は副官である『ミセリア』と向かい合っていた。

彼女は淡々と事務的にその日の仕事の段取りを確認すると同時に、隊員達の調査報告を語る傍ら疑問を口にするかの様にフィルの事を話題に挙げる。

「隊長。宜しいのですか？ ルークスと言う孤児はともかくとして、フィル・ラントはあの家の人間ですが例の末弟です。実力主義の人間が多い我が部隊で評価がはつきりしない者を引き入れるのは内部に不和を招く要因になりますので如何なものかと？」

「不満か？ 『竜血の出廻らし』などと揶揄されているあの小僧を我が隊に迎える事が」

「隊長の目は信用しておりますが、そう揶揄する者も少なくないと言う事です」

竜血の出廻らし。フィルへの陰口の類いであるが、この名前には少々訳があった。

それはラント家の興りにまで遡る。当時のラント家当主は現在のアルケー皇国の帝

となる人物とパーティを組んでおり、生存圏の獲得を目的として龍殺しを行った。

この際にその血液を大量に浴びた事から龍を越える力を得たとされ、その後の建国にも多大な貢献をしたとされている。

この話は口伝で伝わっている話であり、当時を明確に記した記述のある媒体は存在しておらず、半ば御伽噺のような伝説とされてきた。

しかし、フィルの父親を筆頭に今世代のラント家の人間は末弟を除いた全員がその伝説通りの力を持っており、現在の皇国の開拓地獲得に非常に大きな影響を与えている。

例えば長兄の『フォルテ・ラント』。新大陸が発見されたばかりの頃、海中を住処とするドラゴンが制海権を掌握していた為、事故や幸運でもなければ此方から新大陸へ向かう事が出来ない状況であった。

当時、そのドラゴンは海中を音よりも速く進むなどと称されており、出会ったが最後に相手の腹が満たされていない限り死が訪れるとまで言われていた。

そんな相手に、彼は剣を一本携えると見届け人と船の護衛を数名付けて沖へと向かい、悟られるからと魔素操作も使わずに海面を割って海底を露出させる事で海中のドラゴンと擬似的な地上戦を行った。

その当時、見届け人として同行した者は『生きた心地がしなかった』と言いながらも、鋼鉄よりも硬いウロコを易々と斬り裂く姿は正に英雄だったと語り、その戦いに彼が勝

利したからこそ新大陸への足掛かりが出来たのだと力説したらしい。

フォルテ以外にもラント家の人間はその多くが人類の生存圏の拡張と、繁栄の為の露払いを行ってきた歴史があり、それ故に他のラント家の人間に比べると才覚の落ちるファイルは伝承から準えて『竜血の出廻らし』と揶揄されていたのである。

しかし、マニユスは彼の実力をその目で見た事からその様な揶揄など問題がないと判断しており、目の前の部下の懸念を一刀両断した。

「竜血の出廻らしなど、ラント家と言う金の看板に目が眩んだ者達の戯言の一つに過ぎん。確かに奴はラントの怪物共と比べれば劣るだろうがな、問題は看板の豪華さでは無くその内容だろうか？ それとも、貴様も金の看板に目を眩まされたクチか？」

金の看板家名など内容実力とは無縁の代物、そう語る彼にミセリアはそれ以上何も言わず、『出過ぎた進言でした。申し訳ありません』と機械的に謝罪する。

彼女からすればファイルの事はさして興味は無い。生きるも死ぬも実力主義の部隊では己次第であり、家名など正直に言ってもよかった。

だが、部隊の副官として隊員達の間管理を任されている以上、ある程度の意識調査とそれによって得た結果程度は報告しておかなければならない。心にも思っていない言葉であったとしても、別の視点からの意見で判断材料が増えれば思考が柔軟になるからだ。

……尤も、金の看板名門の名前を背負つて入つてくるだろう新人と、それに伴う苦勞を考えると多少の苦言を溢したいと言う気持ちがなくもないが。

そんな感情をおくびにも出さず、秘書然とした表情で彼女は残っている業務報告を進めて行くのだが、その途中でなにかを思い付いたかの如くにマニユスは口を開く。

「……ふむ。この際だ。貴様もあの小僧が金の看板を背負っているだけの役立たずかどうか確認しておけ」

「模擬戦でもしろと？ 別に構いませんが……」

「いや？ 暫く貴様の部下として奴ら二人を付けてやろう、新人教育と言う奴だ」

「……………了解致しました」

ミセリアはよりによって厄ネタを二つ抱える事になった事に対し、内心でため息を吐く。ファイルは先程説明した通りだが、ルークスもルークスで実力試しの私闘をしたがる隊員バカの標的である、実際それとなく調査した時にその様なことを言っていた者が多かった事を思い出す。

血の気の多い人間が多い事だと彼女は思わず頭を抱えそうになったが、隊の性質上情報報の全く無い未開拓地域にも派兵される事も少なくない為、人員の入れ替わりもそれな

りに激しい事からある意味その様な息抜きも彼らにとっては必要なのだろうと無理矢理結論付ける事にした。

……頼むから新人研修の期間が平和に終わってくれます様にと祈りながら、彼女は新人の受け入れの為の準備をするのだった。

功夫之玖

騎士団の花形の部隊への編入が決まったファイルは、正装に身を包みながら兵舎へと向かっていた。

今回は初日のように服を汚される事のないように周囲の音や道行く人々の動きなどにしっかりと注意を払っており、街に着いた時点でどうやって見つけ出したのか、犬のように寄ってきたノーヴァにも食い物を買って与えて対策もしていた。

……尤も、使わない貯金から支払っているとは言えそれなり以上の金額を持ってきたのでファイルとしても痛い出費なのだ。

とりあえず横でへたくソなコミュニケーションを試みられるより食わせて黙らせた方が全然マシであるし、面倒くさい人間に絡まれるよりは金で解決する方が楽だとファイルは思っており、彼も適当なところで別れるつもりだった。

横目で両手一杯の食べ物から次へと頬張っていくノーヴァへ対して一種の異常性を感じはするが、彼もまた両親や二人の兄といった異常な人間のカテゴリを身近に持つており、無意識に彼らを基準に人間を判断していた為に、判断基準が少々歪んでい

る。だからか、彼は彼女を邪険に扱いはするもののなんだ言つて面倒を見てしま
う。

その優しさは、家庭環境に起因する孤独感を埋める為に無意識の内に他人との繋がりを求めてしまつてゐるが故の行為なのか、或いは性格が歪んだ為に見えづらくなつた生来の優しさなのかは分からない。

ただ、ノーヴァはフィルへ対する視線にラント家のフィルターを通していない様な素振りをしている、そう言つた意味では彼女はフィル自身をしっかりと見ている人間だと言えるだろう。異常な人間の一人ではあるが、フィルにとっては数少ない『自分を見ている人』でもある。

と言つても、一回会つたきりの人間ではあるし、そもそも人間不信気味の彼がそう簡単に他人を信じられる訳では無いので、これもまた無意識に行なつてゐる様子見の段階に近いのだが。

そんな風に歩いてゐると、周囲へ気を張つてゐたからか少し先の方で見た事のある顔を見つけてしまう。

それは先日模擬戦で派手にやり合つた相手であり、反射的に不完全な絶招を打たされた為、勝ちを拾つたがその内容は負けたと思えないという、そんな見たくも会いたくも無い男だった。

彼も自分と同じ部隊に入った事をファイルは知ってはいるが、どうやら孤児院の経営者が昔の礼服を彼に渡したらしく、その衣服が少々草臥れているのが見てとれる。

服装に対して嫌味の一つでも言つてやろうかと思いはしたが、屋敷で荒れに荒れた後であり、部屋で散々父親を罵倒していた気疲れからか、絡むだけ疲れると思ひ直す。そうでも無くとも孤児院の子供達らしき幼子達に囲まれている、その内へ絡みに行くのは——
——ファイルにとって家族の差を見せ付けられるような、そんな気持ちを抱かせる行為でもあつた。

——本来ならば、ファイルはマニユス隊に入つておらず、ルークスのみが彼の部隊に編入されていた。その事についてファイルが絡みに行つていたのだが、これもまた運命が一つズレた結果である。

ファイルは、子供達に引き留められ或いは送り出しのエールを各々に受けながら困つた様に、しかし何処か嬉しそうに笑うルークスを横目に見ながらその後ろを素通りして行くのだった。

▽

ノーヴァと別れ、予定の時間よりも早く指定の場所へと向かつたファイルを待つていた

のはマニユス隊の副隊長であるミセリアによる出迎えだった。

彼女の服装は極端に露出が少なく、手袋も付けている。顔立ちは整っており、金髪碧眼の美女と呼べる見た目だが、唯一露出した顔色から色白と言うには些か白過ぎるとファイルは感じた。まるで病人や死人のような、そんな白さ。

ファイルはその顔色の悪さに怪訝な表情を浮かべそうになつたが、部隊に所属する人間である以上体調管理は行われているはずであり、こうして自分を出迎えている事からも隊内で問題視されていないと考え、脳裏に浮かびそうになつた疑問を霧散させる。

「……お早いですね、ファイル・ラント。ようこそマニユス隊へ、私はこの部隊の副隊長を任されているミセリアと申します。以後よろしくお願いします」

ミセリアは歓迎の意を表す様に握手を求め、ファイルもまたそれに応えるように手を握った。

ラントの名に恥じない働きをしなければと、そう思っているが故に自然とその手に力が籠っていたが、此処で予定よりも早くファイルが来てしまった事によって厄介事を生んでしまったらしい。

「副隊長。そいつが例の新人ですかい？」

背後から投げかけられた声。それは歓迎の意味合いの籠った声色では無く、寧ろその逆の雰囲気孕んでいる事が容易に理解出来た。

ファイルもその手の対応をされる事を予想しており、特に何の感情もなく背後を振り返る。

見ればそこには訓練帰りなのか他の騎士もチラホラと遠巻きに彼を見ており、ある意味では手取り早い状況でもあった。

—— ラント家は皇国最強の名を欲しいがままにする名門であり、人類の防波堤とも言われる最終兵器。当代はその異常とも言える戦闘能力によって多くの者から英雄視され、多くの信者を作り出しているが、光があれば影も存在する。

個人の戦力単位が桁外れな彼らは竜種やその他の手に負えない事態の收拾を主な任務としており、一般的な騎士達では達成困難な任務を常日頃から解決している。しかし、それは皇国の為に命を賭している者達からすれば、自分達の無力さを見せ付けられるような物に等しかった。

基本的にファイルを除いたラント家の人間は、家族以外の他人を庇護すべき弱者と一括

りに認識しており、その思想が性格や人間性へ影響を与えている。

誰にも期待しない。何故なら自身を基準にすれば他者は全て弱者であり、庇護すべき存在。故にその強さに英雄の背中を見てしまった者は信者染みた人間となる、だがそうでない者は彼らを怪物と呼び、その性格や人間性を嫌悪する。

それは実力主義の部隊であればあるほど傾向として強くなり、強者に対する警戒心を生む。

勿論この部隊もその一つであり、隊員全てがそうであるとは言わないが、しかしながら目の前でフィルと対峙する男はその類の者だったのだろう。

ジロジロと睨め付けるような視線を向ける男に不快感を感じつつも、実力主義の隊である以上喧嘩を買って打ちのめせばある程度は認められる。暴力的ではあるが、明日をも知れぬ生活に身をやつしているが故の判断基準。フィルはそれを理解しており、敢えて挑発するように男を鼻で笑った。

「そうだよ？　僕はフィル・ラント。ラント家の末弟さ」

「出廻らしの方が、箔付けの為に入隊したんなら出て行きな」

「出廻らし……か。別に有象無象に何を言われても気にならないんだけど、どうやら喧嘩を売りたいらしいね。センパイ？」

「だったらどうした？ 出溷らし」

「実力を教えて差し上げますよ」

「ファイルさん。これから貴方には隊長に会っていただかなければならないので勝手な私闘は許可しかねます。バツツさんも思う所はあるでしょうが彼は貴方の出会ったラントの次兄ではありません。個人的な感情を向けないでください」

貴方の不信を利用した自身への侮りの払拭。ファイルはそれを狙って売り言葉と買い言葉で私闘を成立させようとしたが、ミセリアが間に入って止めに来る。

その表情からは面倒事を起こすなという思いが容易に伝わってくるが、ファイルとしても早い内に自分の立ち位置を安定させておきたい為、この絶好の機会を逃したくは無かった。

正式に入隊してからでも手合わせする機会はあるかもしれないが、鉄は熱い内に打たなければ良い形にはならない。少なくとも私闘を行える程度の自由を得る頃にはファイルに対する視線はある程度固まってしまいうだろう。

それ故に彼は思考を回す。ミセリアの口から出たラントの次兄と言う言葉。それが意味する事は即ち――。

「ああ、センパイは新大陸で亜人に殺されかけたんだ？　もしかしてその時に兄上に『役に立たないから下がってろ』とでも言われたのかな？」

「……副隊長。退いてください、やはり我々はラントの末弟を隊に入れる事に納得が出来ません。せめてその実力を目で見ない事には飲み込まなければいけなくとも、飲み込めない」

腰の訓練用の剣を引き抜き、バツツと呼ばれた男はフィルに向けて構えた。対するフィルも礼服の上着を脱いで肌着になると、受けて立つと言わんばかりに拳を構える。

二人の様子に止めても無駄だと判断したミセリアは、盛大にため息を吐いてから一歩後ろに下がった。

その瞬間バツツは身を低くしながら踏み込み、フィルへと刺突を放つ。

剣の向きは縦では無く横。所謂平突きと呼ばれる物であり、刺突を回避されたとしても横薙ぎの斬撃へ切り替える事の出来る二段階攻撃である。

彼はラント家への個人的な思いはあれど頭は冷静であり、自分の八つ当たりを口実に実力を測る事を目的にしている為か、一切容赦はしていなかった。

少なくともミセリアの体によってある程度視界が塞がれた状態からの不意打ち気味の一撃であり、万が一回避や防御をされたとしても二の太刀で斬り返す事が可能であ

る。

だからこそ、ファイルが半身体をずらす様にしてそれを回避した瞬間、その場で軸足を踏み締めて横薙ぎに切り掛かった彼の動きに澱みは無かった。

しかし——ファイルはそれ以上に疾い。

天才を基準とすれば確かに彼は才能が劣る。しかしそれは相手が災害級の天才であるが故であり、決して無能では無いのだ。

即座に放たれたのは鉄山靠。拳や頂肘を打てば加減したと言えどタダでは済まない為、ファイルは回避と同時に鉄山靠を放つ事でバツツを弾き飛ばす。

彼はミセリアが退いた瞬間に放たれた刺突の意味を瞬時に理解していた。それ故に回避直後の切り返しを狙うほんの僅かな硬直へ合わせ、身体に染み付いた動きを反射的に放つ。

カウンターを合わせられるとは想定していなかったのか、バツツは受け身こそ取る事が出来たものの、ファイルに踏み込まれて立ち上がる前に顔面へ拳を寸止めされる。

「……ま、参った」

「——功夫が足りないね」

得意そうにファイルはそう言うと、この瞬殺劇に呆気にとられた者達を『これで文句は無いだらう?』と言わんばかりに一瞥するのだった。